

田中角栄と安倍晋三

写真はノンフィクション作家・保坂正康著の朝日選書。表紙帯裏に、「角栄は戦場で人生を学び 安倍は祖父に手法だけを学んだ」とある。東条英機と岸信介(安倍の祖父)、昭和天皇と今上天皇などを比較し、激動の昭和、劣化の平成一二つの時代の「因果」を問う。

安倍政治に象徴される「危ない時代」の正体にせまる、興味深い指摘も多いが、ここでは序章の「特攻隊」にまつわる話だけを紹介したい。

太平洋戦争という、昭和の戦争が終わったのは70年余も前のことだ。国策としての軍事行為はすでに歴史の後方に過ぎ去ったのだが、しかし戦場に散った兵士たちを知る者は、その記憶と戦い続け、その生が終わるまで戦争は終わらない。そのことを私自身が自覚することは、今なおありうる。一例をあげるが、平成22(2010)年のころであったが、千葉県のある市で講演したときの体験である。講演終了後に一人の高齢の男性が話しかけてきた。年は80歳半ばを超えているであろう。「戦争中、私は学徒動員で航空機の整備兵でした」「私は特攻隊員を5人殺しました」彼は沈鬱な表情である。私はすぐにその意味を知った。つまり5人の隊員の出撃を手伝ったというのだ。特攻隊を描いた最近の映画やテレビドラマを見ると、搭乗員が勇ましげに飛行機に乗り込んで飛び立つ光景を目にする。ある映画では主人公が仲間に「さあ行こう」と微笑みかけて立ち上がる。まるで喜んで死地に赴くようだ。しかし、その老人は現実に出撃命令を受けると隊員たちの大半が動転し、狂乱状態になったというのだ。

「命令を聞いたとたん、ある隊員は気絶し、ある人は失禁する。泣き喚く人もいたのです。私はそうした人を5人ほど、出撃させるために飛行機に乗せました。彼らを待っているのは死以外の何ものでもありません。当然ながら恐怖で足がすくむ。飛行機までのわずかな距離をまともに歩けない者もいた。体がよろける。座り込みそうになる。本心は特攻作戦に加わりたくないのです。そうした隊員の体を支え、操縦席に誘導しました。私は同世代の5人を死地に送ったのです」操縦席に座らせれば、彼らはパイロットの訓練を積んでいるから飛行機を離陸させる。ただし目的地に着ける保証はない。死への恐怖で一種の錯乱状態に陥り、鹿児島湾沖に墜落することも少なくなかったという。中には覚醒剤を注射されて恐怖心を軽減されて出撃したケースもある。そう考えると、5人の搭乗を手伝った自分はさながら死神である。彼は自分が殺したと70年近く悩んできたというのである。今、自らも死を前にして彼らへの申し訳なさをあなたに伝えておきたい、心を落ち着かせて死んでいきたい、ともつぶやいた。彼らの御霊に朝夕祈っていると漏らした。

(2017年12月5日)

